

高校生の複数集団への参加－若者の語る居場所観

比較教育社会学コース博士課程 御旅屋 達

Relationship between High School Students and their Groups

-Seen from the Perspective of Young People-

Satoshi OTAYA

The purpose of this paper is to think again our view of "ibasho" by describing talking given by high school students and to give suggestion to existent "ibasho" supports.

The author divided the view of "ibasho" into two types. One is "Physical resource use type" which recognizes "ibasho" as the place that can be used freely and has no compulsion. And the other is "Interpersonal relationship type" which recognizes "ibasho" as interpersonal relationship. The author thought that the "ibasho" supports of Japan have been biased to the view of "Physical resource use type" and the aspect that saw the influence by "there is ibasho" lacked in the "ibasho" study. So the author tried to read a realistic aspect of "ibasho" from high school students' talking.

The method adopted is participant observation and interviews. The target is the high school students who positively participated in a private, educational enterprise. They were asked to talk about how they behaved at their school and home.

The following findings were made. High school students construct "ibasho" based on common background and roles in the group while they are coming and going in two or more groups. They are sometimes worried because the relation is not made up, and, it is considered to be worthless to participate in other groups by using "Ibasho" that already exists. And there is also a case that having "Ibasho" becomes confidence, and it backs up participation in other groups.

0. はじめに—目的と関心
1. これまでの「居場所」観の検討と分析の視点
 1. A. 「物理資源活用型」居場所観
 1. B. 「対人関係型」居場所観
 1. C. 分析の視点
2. 研究の方法
3. 若者の語る「居場所」
 3. A. インタビューから見る学校像
 3. B. 「居場所」の影響力
4. 結論

0. はじめに—目的と関心

本稿の目的は、若者の語りの中から「自らの所属する複数の集団をどうみているか」を描き出すことによって、従来単層的に語られてきた「居場所」を問い直し、「居場所」支援のあり方に示唆を与えることにある。

「居場所」という言葉が学術的、一般的に使用されるようになって久しい。1980年ごろには登校拒否が社会問題となり、居場所という言葉が世間において教

育の問題として語られ始めた。当時においては、「居場所」という言葉は文字通り場所を指していた。90年代に入ってから、文部省が「心の居場所」というキーワードを打ち出したことからわかるように、単に場所のみを指すものではなくなっている。また、当時から現在にかけて共通していることとして、「居場所」という言葉について触れられる時、「居場所がない」というように語られることが多い。確かにそれを裏付けるものとして、全国には居場所型施設というのが相次いで建設され、子どもたちに居場所を提供しようという運動が各地で起こっている。そしてまた、そのような子どもたちが実際に多く存在する、というのも事実であろう。また、文部科学省は平成16年度から、3年計画で地域の居場所づくりを支援する「地域子ども教室推進事業」を、平成19年度からは厚生労働省と連携し、「放課後子どもプラン」を実施している。

このような状況を反映し、「居場所」を題材とした研究も少なからず行われてきている。次章では、これまでの居場所研究を概観し、本稿の特徴を位置づけることとする。

1. これまでの「居場所」観の検討と分析の視点

「居場所」という概念にはさまざまな解釈が考えられる。まず、「場所」といった部分を考えるとき、それは具体的な「場所」を指すのか、精神的な部分も含むのか、という問題がある。また、「居る」という部分についても、他者の承認のもと、その場に居てもいいということなのか、単に安らぎの場所であるのか、さらには、単純に過ごす時間が長い場所なのか、というようにさまざまな解釈が考えられる。例えば住田(2003)や萩原(2001)が主に「居場所」の心理的な機能を重視しているのに対し、行政レベルでは空間的な意味合いを強めた「放課後子どもプラン」において「居場所」を強調している様子が見受けられる。

研究者たちもこの点には苦慮しており、「居場所」の定義はどの先行研究を取ってみてもそれぞれ異なっており、共通理解がとれていないのが現状であるように思える。本章では拡散する居場所観を2つに分類し、筆者の立場を明確にすることを試みる。

1. A. 「物理資源活用型」居場所観

一つは「物理資源活用型」居場所観とも言えるべきものである。「居場所」を自由に参加でき、学校のように強制力を持たない場所としてとらえるものである。多くの居場所型施設と呼ばれるものも「居場所」をこのようにとらえていると考えられる。居場所型施設の利用状況の調査を行った新谷(2001)、下校時の様子を観察し、居場所の可能性を探った水月ら(2003)、駄菓子屋での居場所構築の様子を記述した澤田(2003)などがこのスタンスに近い。

新谷(2001)は、設立当初から子ども・若者に対して居場所を提供しようという目的を持っている「居場所型施設」を対象に据え、居場所型施設「ゆう杉並」において1999年1月から2000年10月まで観察とインタビューを行い、居場所型施設に対して、どのような若者がどのように関わり、そこを「居場所」としているのかを明らかにしようとし、結論としてゆう杉並を利用する若者の姿の特徴として、「やりたいことの追求」「多用な距離の取り方」「漸次的参加」の3点を挙げている。

ゆう杉並は多用なニーズに応えるべく多くの活動を準備し、子ども・若者達はその資源を自らのペースで活用していると言える。新谷の研究は、居場所型施設の利用の様相を当事者からの視点で描き出したという意味において非常に示唆的である。

1. B. 「対人関係型」居場所観

「居場所」というものは物理的資源が整っていれば成立するののかというところというわけではない。萩原(2001)は『「居場所」』という言葉が示す意味は、空間の次元から心の次元を経て、『自分』という次元から己の存在根拠を問おうとする存在論的な次元に来ている」とし、大学生への自由記述調査をもとに、「居場所」とは「自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれ」、「生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる」としている。であるとすれば、子ども・若者の居場所の様子を読み解く際には、研究の対象者のみならず、対象者を取り巻く環境までも含め、その関わりの様子を丁寧に読み解いていく必要がある。

また、住田は約3000名の小中学校生のデータから居場所を感じる場所、その相手について居場所の現実の様相を明らかにした。住田(2003)は、家庭、学校、地域での子どもの居場所のタイプを4タイプに類型化した上で、それぞれが「子ども文化の中で形成」され、とし、「子ども自身がホッと安心できる、心が落ちつける、くつろげる、そこに居る他者から受容されているという実感をもつことができる」と定義づけている。住田の研究は、従来あまり触れられてこなかった複数の場にまたがる居場所の重層性を具体的に表した点において非常に示唆的である。

「物理資源活用型」居場所観においては、「居場所がない」とされる子ども・若者たちに落ち着ける場所を提供することが支援の形となっている。たしかにそこには気軽に参加できる間口の広さが存在する。しかし、対人関係をうまく築くことができず、学校・家庭などで生きづらさを抱えている子ども・若者達にとって、自ら資源を活用していくことは困難を伴うのではないだろうか。つまり、従来の居場所支援に「対人関係型」の視点を取り入れていくことが必要となってくる。

本研究においては、居場所定義について萩原(2001)の定義を踏み台とする。萩原の居場所観には居場所の階層性の視点も組み込まれている。萩原は「居場所が脅かされるとき、私たちはより自明性の高い居場所に一時的に後退する」とし、状況に応じた居場所の移動、複数の場にまたがる居場所の性質を認めている。

1. C. 分析の視点

萩原(2001)の居場所定義に従えば、居場所とは個人と集団との関係性そのものであるといえる。こ

のように考えたときに、BergerやLuckmannの社会的アイデンティティ論が参考になると考える。BergerとLuckmannは、知識社会学の立場からアイデンティティと社会の間の関係性について弁証法的な関係を見出した。彼らによると、「社会は客観的現実として存在すると同時に主観的現実としても存在」し「社会を外化、客観化、それに内在化の3つの契機から成る不断の弁証法的過程として理解するとき、初めて正しく捉えることができる」という。また、「個人は自己自身の存在を社会的世界の中へ外化すると同時に、それを客観的事実として内在化している」という前提の上で、「内在化は、まず第一に自分の周りの人々を理解するための基礎であり、第二に、世界を有意味的であると同時に社会的でもある一つの現実として理解するための基礎である」と述べている（Berger訳書、2003）。

さらにBergerはアイデンティティについて「個人は社会化されてこそ、指定の人物となり、指定の世界に住むにいたる。主観的なアイデンティティと主観的な現実とは、個人と彼の社会化に責任のある有意な他者（significant others）たちとの間に交わされる同じ対話法（dialectic）のなかで産み出される」とし、個人は「社会的世界の共同製作者」であり「自分自身のそれであり続ける」としている（Berger訳書、1979）。

このように相互承認によって居場所を得ることとアイデンティティの形成は密接に関係しており、ある集団によって個人のアイデンティティは影響を受け、あるアイデンティティを持った個人の集団への参加によって、集団もまた影響を受けるといった相互作用が生じることが予測される。

2. 研究の方法¹⁾

以上の観点から、本研究ではインタビューを中心に若者の語る「居場所」を考察していく。筆者は2002年9月から幼児から大学生までを主な対象とした民間教育企業、Aの教室に赴き、参与観察を行い、その中で計4回インタビューを行った。本稿では主にインタビューデータを中心に用いることとする。

Aは、全国規模での教育活動を実施している民間企業である。この組織は、全国を約10の支部に分割し、各支部はさらにいくつかの地区に分割される。教育内容は多岐にわたるが、主に言語習得・コミュニケーション力の育成を目的とし、英語劇などを行っている。会員は、幼児から大学生までが存在する。活動

の形態の基本は、パーティと呼ばれるものである。各パーティは、チューターと呼ばれる女性によって運営される。会員は月々の会費をAに納めるため、いわばフランチャイズのような形態で運営されている。Aの収入源は主にこの会費となる。このパーティにおいては、一般的に、年齢によるクラス分けが行なわれる。例えば、幼児クラス、小学生クラス、中高生クラス、大学生クラスといったものである。それぞれのクラスは週一回ずつ行われ、会員はこのうちのどれかに通っている。また、パーティ全体のイベントや、活動も頻繁に行われている。

ここでは、その中でも、筆者が研究に際してかかわってきた2つの活動について述べていく。

1. Xパーティ（2002年9月～2003年9月）

既に述べたように、Aの活動の基本単位はパーティと呼ばれるものである。筆者は2002年9月より、東京都のX（指導者の名字）パーティにて観察を行った。会員の在籍数は32名である（当時）。教室は、マンションの一室であり、指導者の自宅も兼ねている。10畳ほどのリビングにあたる部屋で活動している。筆者は週一回、20:00から行われる中高大生クラスに主に観察に赴いた。

2. 西東京地区小中高大生活動（2002年12月～2003年3月）

Aの活動のひとつ。西東京地区（武蔵野市、三鷹市、小金井市、調布市、府中市など）に所属する小中高大生会員（小学生は高学年限定）の有志によって組織され、2名のチューターが担当として補佐。2003年2月の東京支部テーマ活動²⁾大会³⁾を目標にひとつのテーマを定めて活動。2002年度は約50名が参加。主に公民館、廃校になった小学校などを活動場所としていた。高校生十数名を中心とした自主運営が行われている。

なお、対象は高校生とした。Aの活動を研究の対象にしたのには、高校生会員のA内での多様な活動領域、Aに対する好意的な姿勢などが垣間見えたこと、保護者の意向によって学校外の活動に参加しているわけではなく、ある程度自分で理由を見つけての参加が行われている可能性が高いことなどが理由として挙げられる。基本的には活動には参加せず、横から活動の様子を見守っている立場であった。

インタビューは、第一回については、観察時に協力者を募り、参加を承諾してくれた4名を対象に行った。以降のインタビューに関しては個別に協力をお願いしている。

インタビューは計4回、2003年2月、7月、11月、

12月に行った。場所はそれぞれ異なるが、第2回を除いて食事や喫茶を兼ねている。日時、実施した街などはインタビュー対象者となる高校生の希望で決定した。以下にそれぞれの概要を記しておく。

	実施年月日	対象者	概要など
第1回	2003年 2月22日	渡辺さん（当時高2女子） 吉井さん（当時高2女子） 藤田君（当時高2男子） 白井君（当時高2男子）	観察時に協力を呼びかけ、参加を承諾してくれた4名を対象に実施。結果的にAの活動において中心となって積極的に参加していたメンバーが集まった。A、学校、家庭での姿などを聞き取ることを目的とする。4名同時に実施。
第2回	2003年 7月26日		本稿では使用しない
第3回	2003年 11月21日	渡辺さん（当時高3女子） 荒井さん（当時高3女子渡辺さんの学校の友人）	学校の友人と共にインタビューを取ることで、学校での様子、学校に対するかかわり方などをより鮮明に聞き取る。
第4回	2003年 12月16日	白井君（当時高3男子） 町田君（当時高3男子） 白井君の学校の友人）	同上

インタビューについて桜井（2002）は、「語りえない場」であり、また「語りたくないものをつい語ってしま」う場であると定義付けている。対象者は「語り」から、「自己」を表現する。桜井はインタビューはその自己（像）、および、対象者の環境（像）が対象者の中でどのように構築されているかを考察するものであるとしている。本稿は、桜井の提唱するライフストーリー法は直接は使用していないが、インタビューに対する桜井の姿勢は本稿にも十分に示唆的であり、また本稿でのインタビューに対する姿勢も桜井を参考に行っている。

3. 若者の語る「居場所」

3. A. インタビューから見る学校像

Aの中心的メンバーである4人に集まってもらった第1回インタビューでは主に、学校・家庭での姿を語ってもらった。有名私立大学の附属高校に通う白井君は言う。

記録1 2003年2月22日（第1回）

白井：俺はもう割り切ってる。ぶっちゃけ、学校は一、俺今は、勉強面でやりたいことを追及する場にしちゃってる。[中略] 息抜きて感じ [中略]
 白井：うちの場合は、色があるから、もう。体育会系に入っていないと、実際つらい、っていう学校だから。[中略]
 白井：だからきつい、っちゃあきつい……。けどまあ、仲いい人は、仲いいし。中学からずっと一緒だからさ。中学で仲良かったやつはずっと仲いいから。[中略]
 白井：まじうわべだよ、学校なんて。うわべの付き合い。[中略]
 白井：でも部活やってる友達は何一、違うよ。あの、俺も同じ部活だったやつとかは一、やっぱ、なんか、一緒にしてるじゃん。その辺Aと一緒にだから。[中略]
 白井：うん、全体の中の自分としては全く見てないというか、見ようとしてないというか。うーん、本当、自分の時間を作って、学校でも。で、やりたいことやってるし、基本的に聞きたい授業聞いて、っていう感じ。

後の第4回インタビューでも明らかになることだが、白井君は学校生活に対して全くといっていいほど魅力を感じておらず、「辛い」という言葉を何度も発していた⁴⁾。「体育会系に入っていないと、実際つらい」と言うように、「部活に入っている」ことが、学校生活を上手に送るにあたって重要な意味を持っていることをほのめかしている。また、「全体の中の自分としては全く見てない」としているように、学校内のコミュニケーションをはじめから拒否していることが読み取れる。さらに、白井君の場合はコミュニケーションどころか全体の中の個であることも拒否してしまい、もはや、学校という集団が白井君にとっての準拠集団にはなりえていないことがわかる。「勉強面でやりたいことを追及する場」と定義付けることで、学校内のコミュニケーションを学校には不要なものとして切り捨ててしまっていることが窺える。

また、渡辺さんは以下のように語る。

記録2 2003年2月22日（第1回）

筆者：学校、好き？
 渡辺：きらーい（笑）あ、わかんない
 渡辺：最近は一結構楽しくなってきたと思うだけどー。[中略]
 渡辺：ぶっちゃけどうでも良いつて感じ [中略]
 渡辺：なんかあたしは一、学校でーそこまで一、なに？仲いい友達を作ろうとか一、思わない。思わないの、今も。たぶんそれは吉村⁵⁾とか一、Aとかでー、すごい仲いいとか、すごいなんとなく相談できる人とかがいるから、かもしれ、だと思っけどー。なんか学校も一、休み時間に喋るとか、そういう時だけでー、他に遊んだりとかは…。家遠いのもあるかもしれないけど、しないしー。[中略]
 白井：まじうわべだよ、学校なんて。うわべの付き合い。
 渡辺：うん、うわべだと思う。それはすごい思う。

渡辺さんは、東京都にある私立の女子高に通ってお

り、Aの中では活発な、熱意のある子として認識されている。小中高大生活動においても中心メンバーとしても活躍し、活動の主な進行役としての役割を自然に得ている。また、活動に対する前向きな姿勢、熱意が皆に愛されているようでもある。

渡辺さんは、学校に仲のよい友人はいらないとはっきり述べている。ここでは渡辺さんの学校における対人関係に対する考え方を読み取ることができる。渡辺さんにとって学校という場合は親しい友人を作る場ではなく、学校における友人は休み時間という切り取られた時間帯をやり過ごすための「うわべだけ」の関係になってしまっていることがここからはわかる。また、ここで、「Aとかで、すごい仲いいとか、すごいなんとなく相談できる人とかがいるから」と話していることにも注目して見る必要がある。渡辺さんにとって親友、つまり、なんでも相談でき、お互いが自分というものをさらけ出せる対人関係、の存在は既に満ち足りてしまったものであり、学校という集団の中に新しい関係性を作る必要性を見出していないことがここからはわかる。

藤田君は、第1回の対象者の中では特異な存在である。渡辺さん、吉井さん、白井君が、集団の先頭に立って指導者的な立場を取っているのに対し、藤田君は彼ら彼女らに慕われつつも、指導者的なスタンスは苦手であると言っている。第1回のインタビューで協力してくれた4人は私生活でも特に仲の良いグループであるが、藤田君は異色の存在といつてよいだろう。

記録3 2003年2月22日（第1回）

藤田：えー。（学校の）好きじゃないとは、雰囲気かな。
[中略] なんていうんだろ、基本的に…なんか、人間の第一印象とかが、なんか、あまり好きじゃないんだよね。[中略] 見た感じさー、金髪だったり、最近あるわけじゃん。そういう人が、多い学校なの。基本的に校風も自由だからー。なんかそっからつながって学校の雰囲気も、うわわあー、みたいな。騒がしい、競争的な。[中略] そんな多くの人と話したこと無いけど、仲良くなろうとも思わないし、雰囲気があって、基本的に、学校では一人である。

藤田君は学校を好きでない理由として、雰囲気という言葉を挙げている。ここでは雰囲気という言葉は、集団の成員の性質のことを意味していると思われる。藤田君の通っている高校の生徒文化というような言い方もできるだろう。藤田君は金髪の生徒を生徒文化の象徴として提示していることがわかる。もちろん実際に金髪の生徒ばかり、ということではないのだろうが、学校の雰囲気に対する違和感を藤田君が感じているのは間違いない。

ここで注目するのが「そんな多くの人と話したこと無いけど、仲良くなろうとも思わないし、雰囲気があって、基本的に、学校では一人である」という藤田君の言葉である。藤田君にとって、学校の友人は「そんなに多くの人と話したことないけど」「仲良くなろうとも思わない」人たちとして認識されている。この言葉からは、藤田君が学校の文化にコミットすることを拒否していることがうかがえる。Bergerのアイデンティティ論に当てはめるならば、藤田君は自分自身に学校文化を内在化することを拒否してしまっていることになる。ここには「とりあえず話してみてもそこから友達になるか決める」と言ったような試行錯誤のプロセスは存在していない。「私には関係ない」と宣言することが、藤田君による学校文化とのかかわり方である。金髪→友達にならない、という流れではなく、学校＝友達にならない、というように等号で結ばれてしまっているのである。

このような藤田君の学校観の裏にある理由は、インタビューを続けるに連れて徐々に明らかになっていく。以下に提示するのは学校や家庭におけるスタンスについて質問したときの記録である。

記録4 2003年2月22日（第1回）

藤田：だから、さっき言った学校の雰囲気もあるのかも知んないけどー、みんなは想像できないけど、俺は一、自分のクラスのあの雰囲気の中で前に出るのはやだ。[中略]
藤田：学校って言うとなんか、統一性もないんだもん。そんな中で自分の意見言うってのも。統一性っていうか、向いてる方向が違うんだよね。

この記録を読んでいくと、藤田君がクラスの文化の中に「統一性」を感じていないこと、その中で目立つことに対する恐怖感を感じていることがわかる。また、「向いてる方向が違う」といっているように、クラスがバラバラであることを藤田君は感じているらしい。この記録からは詳しいことはわからないが、「あの雰囲気の中で前に出るのはやだ」と繰り返しているように、もともと人前に出ることが苦手である藤田君にとって、自分が認められない、または自分が信頼できない環境で人前での自己表現をすることの難しさが現れている⁶⁾。

渡辺さん、藤田君、吉井さんの3人が皆学校に対して決して肯定的ではないのに対し、吉井さんは一人肯定的な視点から学校を見ている。

記録5 2003年2月22日(第1回)

吉井：うちの学校は一，あたしなんか，好きな人が多い。一緒に面白いこともしゃべれて一まじめな話もできる友達が多くて一なんかそういう，なんだろう，うん，Aとは又別に，うん，まあ，普通に，なんかいつも，毎日のように一緒にいる人たちだから一普通に，普通に普通(笑)，楽しい。

と，あるように，吉井さんが自然体で学校での関わりを楽しんでいることが見て取れる。友人に恵まれている事が一番大きいのだろうが，吉井さんは，その状況を「普通」と繰り返している。吉井さんが他の3人と比べて，学校に対して語る言葉が少ないのは満ち足りているからこそ，あえて語ることもないのであろうか。それが「普通」という言葉であり，あえて語ることもできない，という部分に現れている。

また，学校でのスタンスについて話してもらった際にも，吉井さんが学校外で得た経験を上手に学校での生活に還元し，実際に役立てていることを読み取ることができる。

記録6 2003年2月22日(第1回)

吉井：…あたし仕切る。ホームルーム委員だしー，それから行事のリーダーだしー。
藤田：すごいねえ
白井：すばらしいね，これがAと学校生活の両立してる模範だと思うね。
吉井：だから，そういうことができるのも，A小さい時からやって，大きい人見てたのもあるしー，今実際，同年代だったりー，すごい五十何人とかいう人数をまとめたってきて，それを進めてくってという立場を何回もやってるから，学校でもできると思うし，抵抗がないっていうか，みんなの前に立つのも，意見を言うのも，普通にできるっていうか，だからやっぱりAとそこは関わってる。

という会話がなされているように，吉井さんにとって，自分の姿を表現するに当たって，Aであるとか学校であるといった環境は表現に対する制約の要因とはなりえていないことがわかる。むしろ異なる環境においても，変わらず同じことを表現できるということを誇っているようにも見える。積極的な活動を見せる吉井さんの発言に対して，藤田君や白井君が賞賛の言葉を投げかけているように，実際にAでの経験を内在化し，Aではなく，学校という異なった場において外化するという行為は難しいことであると認識されていることもここから読み取ることができる。

3. B.「居場所」の影響

第1項では，高校生の目から見た学校観について記述し，考察してきた。本項では，高校生たちが，学校

という場でどのように過ごし，そしてどのように学校の外と行き交っているか，ということを対象者の学校での友人を交えたインタビュー(第3回，第4回)をもとにさらに詳しく考察していく。

インタビューの対象は渡辺さんとその学校の友人荒井さん，白井君とその学校の友人，町田君である。渡辺さんと荒井さんは共に東京都下の某女子高に通う高校3年生である。二人は高校に入ってから友人である。高校2年に同じクラスになってから友人関係が始まっている。現在は二人は別のクラスに在籍している。

白井君と町田君は東京都内の某有名大学の付属高校に通っている。白井君は高校3年生，町田君は現在留年していることもあり，高校2年に在籍している。二人は小学校からの友人関係であり，偶然同じ付属中学に入学したことから友人関係を開始している。学校内では，お互い違う学年のクラスにいて，町田君が野球部に在籍していることもあって一緒にいることは多くない。

記録7 2003年12月16日(第4回)

町田：楽しいっすよ。学校・・・っていうよりまあ，学校を楽しんでいるっていうより，学校にいる面を楽しんでるぐらいが。学校が楽しいっていうのはないす。[中略]
町田：やっぱ・・・やること見つけないと・・・ぜんぜん楽しめないよね。[中略]
町田：まあ，部活だったら部活で，自分でやること見つけるならそれで。何もやることない奴は，友だちの輪も広がらず・・・みたいな感じすね。多分それは相当つまんない。[中略]
白井：俺は，部活やってないから，学校は，学校の友だちとも楽しくないわけじゃないけど・・・はっきし言って身を委ねてる時間が圧倒的にAのほうが多いから，やっぱり，遊ぶ回数も少ないっていう・・・。

「学校は楽しいか」との質問に対しての白井君と町田君の回答である。

町田君も学校は楽しくない，しかし学校の仲間というのは楽しい，と答えている。また，「やること」を発見することが学校生活を楽しむ秘訣であるとしている。これに対して，白井君は自分が部活をやっていないことによって，学校の友人と遊ぶことが少ないことを語っている。第1回のインタビューでも「うちの場合は，色があるから，もう。体育会系に入っていないと，実際つらい，っていう学校だから」と述べているように，白井君にとっては部活に入っていないことが学校での居場所のなさを作り上げている大きな原因となっている。

記録8 2003年12月16日（第4回）

白井：楽しくないわけじゃないんだけど、思う存分楽しんでるか、っていうと、そうではない。それにやっぱり俺には学校より楽しい部分があるからしょうがない、と思ってる部分はある。俺はここでは生きてないんだって思って、俺が生きるのは午後4時からだ、っていう。でも実際つらい。生活の中心に近いのはAより学校だし・・・でも、自分の中における割合は一、絶対Aのほうがおっきいから。

ここで白井君は、自分の周りにいる友達との関係の希薄さを嘆いている。もし町田君に野球部の友人がいなければ、今の友達とは昼食をとってないかもしれない、つまり、今の友達は代替物であり、あくまで、他のコミュニティに属している別世界の友人である、ということをお白井君は感じ取っている。それが結局「俺はここでは生きてないんだって思って、俺が生きるのは午後4時からだ」という部分に現れている。このように、自ら意識的に学校を居場所としないことで、そこで承認されない自我を防衛しているのである。白井君がこのように、自分のアイデンティティを閉ざしてしまっている以上、学校は居場所として成立しない。白井君はあえて学校を居場所としないことにより、アイデンティティを守ろうとしているが、そこには学校も居場所にしたい、アイデンティティを開放したいという欲求も存在している。ここで白井君の中に「も実際つらい。生活の中心に近いのはAより学校だし・・・でも、自分の中における割合は一、絶対Aのほうがおっきいから。」という葛藤、つまり、自分の生活の中でも時間を多く割くことになっている学校でも自我を開放したい、しかし部活に入っていない、それをする余裕がないという葛藤が生じている姿がわかる。

記録9 2003年11月21日（第3回）

筆者：今学校での友達の作り方ってのを聞いたやんか。それと、Aでの友達の出来方って・・・
 渡辺：Aのほうが・・・なんだろうね、「よっ」みたいな（笑）もっと簡単。学校より簡単。向こうも、なんか、同じことやってるじゃん。[中略]学校だと、知らない人だと喋れない。怖くて。[中略]で、言うか、引かれそう。相手から。同じクラスだったら平気だけどー。他のクラスとかだったら知ってる人しか喋れない。
 筆者：なんでAやと喋れんの？
 渡辺：[中略]なんでだろうね、普通の中小高大生活とかだったら知らない人、いないし、来ても・・・あ、知らない人だなと思ったら喋りにいく。喋ってくれるって思ってるから。喋りにいくし、怖いとか思ったことないけど。なんでだろうね。

渡辺さんにとって、Aという場所が自由にアイデンティティを表出させることのできる場であることを示

している。それに対して学校という場は見ず知らずの人間に突然話しかけることのできない空気が漂っていることがわかる。もちろん、一般的に考えてみても、見ず知らずの人間に突然話しかけて友達になる、ということが難しいことはわかる。本稿においても、その点で学校文化を攻撃するつもりはない。しかし、ここで重要なのは、渡辺さんがAにおいて積極的に人に話しかけようとしている点にある。学校という場において幅広い繋がりを持とうとはしない渡辺さんがAという場においては広い繋がりを求め、ためらいもなくありのままの姿で他者とのコミュニケーションを求めている点は興味深い。何かひとつのことをやっている、ということから生じる共通基盤が渡辺さんを対人関係上の不安から解放しているのである。

記録10 2003年11月21日（第3回）

筆者：Aの私があるから学校の私がある、学校の私があるからAの私があるみたいな、そういう影響ってあるのかな？
 渡辺：あつ、どうなんだろうね。でも、Aを中3でやってて一、から始めたから、多分高校で一、友達作るのとか一、は一、その、中学校の時よりかは一、やってなかった時よりかは一、積極的にになったかもしれない。今は、まあ、そんなでもないけど。入った時とかは。
 筆者：逆は？学校からAの私への影響は。
 渡辺：学校からA・・・、あーでも性格、なんか強くなったかもしれない。[中略]この前-X先生のパーティン時に一、先週の。「渡辺さんが〇〇やればいいじゃない」みたいな、一番前に出て一、みたいな、言われたの。でそこで、「やだよー」って言ったら、「断った！」とか言って、「わー渡辺さんが断った！性格変わったね」とか言われて。言われるけど、けどなんかね、ちょっと、強くなったかもしれない。
 荒井：変わったと思う私も。2年からでも変わったと思うもん。[中略]
 渡辺：思う私も（笑）すごい言うから（笑）前はなんか、「あ、これ言ったらダメだ」みたいな、ちょっとやなことでも「あ、いいよーやるよー」とか言ってやってたけど、このごろは多分言わなくなった。

渡辺さんには、高校に入ってから対人関係に変化が生じている。学校においては友達を作るにあたって積極的になり、Aにおいてははっきりとした意思表示をするようになったと話している。Aにおいてさまざまな友人と自由に話すことができるようになり（記録9参照）、それが学校という空間における友人の作り方に影響を与えている。また、学校での仲間関係、特に荒井さんとの関係がまたAでの在り方に影響を与えている。「何でも引き受ける」と思われていた渡辺さんの思いがけない変化にX先生も戸惑っている。その変化を証明するものが以下の事例である。

観察記録 Xパーティ通常クラス 2002年11月15日

藤本さん、渡辺さん、原口君は渡辺さんが夏に参加したアメリカ、ミシガン州への1ヶ月のホームステイプログラムの思い出について、楽しそうに話している。

と、そこへX先生が「そうだ、西東京地区のテーマ活動発表会の実行委員長、渡辺さんやらない?」と、何気なく話を振る。それまで、ホームステイの報告に一生懸命だった渡辺さんは「え?ちょっと待って?」と、突然の要請に状況を理解できない様子を見せる。X先生に詳細を聞くと、「えーまじで?」と、戸惑いながらもまんざらでもない様子である。X先生も「渡辺さんがいいんじゃない、慣れてるし。」と、他のメンバーにも同意を求める。それを聞いた渡辺さんは即座に「慣れてないよー」とアルバムのページをめくりながら苦笑いとともにお返事。結局渡辺さんのはっきりした返答は聞かれなかったが、嫌がるそぶりもなく、むしろやる気になっているように見受けられた。

記録10で語られていることと同じことがちょうどその1年前の観察記録に残っている。X先生は渡辺さんにいきなり実行委員長の役職の話を持ちかけ、また、他のメンバーにも「渡辺さんがいいんじゃない」と同意を求めることで半ば決定事項のように話を進めている。当時渡辺さんは高校2年生であり、荒井さんと仲良くなってから約半年強経過した頃である。筆者は当時の記録において渡辺さんもこのX先生の申し出に対してまんざらでもない様子であるというように記述している。しかし、記録10を読んでわかるように、渡辺さんは決して大きな場で一番前に出るということを好んでいるわけではなかった。ここではまだ、渡辺さんは断ることができるほどの関係性をAの中では築けていなかったことがわかる。

「私は何でも引き受けるとか思ったらしくて(笑)」というように、渡辺さんの言葉からは、断った自分に対しての自信を感じ取ることができる。渡辺さんにとってAの中で新しい関係性が生まれた瞬間であったと考えられる。クラスにおいて出逢った新しい荒井さんのアイデンティティとのかかわり合いの中で渡辺さんのアイデンティティ、居場所形成にも変化が生じたと言ってよいであろう。

この変化は側にいつもいる荒井さんの目にも明らかであり、「変わったと思う私も。2年からでも変わったと思うもん」、「思ってること言うようになったよね」と、その変化を称えている。

記録11 2003年12月16日(第4回)

(「Aの自分と学校の自分は違うか」という質問に対して)
白井: どうなんだろうな、違う、違うのかなー、分けてるつもりはない。・・・違わないと信じたいね。ははは。[中略]
Aか学校かというよりは、俺にとっては吉井がいるかないかみたいなの、そういう違いしかないからー、例えば、俺はでもそれは誇りに思うけどー、例えばその西東京のメンバーでいるときっていうのは、ほんとになんか、全てのことが役割分担されててー、Aを進めるにあたっても、俺がめっちゃくちゃしゃべってー、誰かがフォローするみたいなの、みんなで飯食ってても、俺は片付けしないけど、誰かが片付けてくれるみたいなの(笑)[中略]それが、その、人がいなすぎるバージョンが学校かな、っていう。別に例えば、学校にー、藤田がいれば、変わらないと思う。ほんとそんぐらいの差だと俺は思う。学校でたまに休み時間一人で本読んでるからね、俺。

白井君はAにいるときの「自分」と学校にいるときの「自分」は基本的に同じであると話している。アイデンティティ概念の基礎を成すテーゼである「私」は「私」であるという感覚を白井君が持っていることは間違いない。それは、学校という空間でのかかわりにおいても、Aという空間でのかかわりにおいても変化せず一貫したものである。しかし、これまでに述べてきたように、白井君は学校に対して居場所の感覚は持ちえていない。また、自らを学校の人間と位置付けるか、Aの人間とするかの狭間で葛藤を生じさせている。この記録においても「違わないと信じたいね」というように、自らを客観視したときに学校における不満足感がどうしても目に入ってしまうのであろう。学校において確固たる「私」の表出ができていないことの原因として、白井君は「周り(にいる友人)が違う」ということを挙げている。吉井さんに代表される自分のアイデンティティを受け止めてくれる人がいるかないか、そういった人に囲まれているかないか、そういったことが彼にとっての居場所形成に大きく関わっている。

白井君の居場所となっているAの仲間集団においては、自然発生的な役割分担が行われているという。また、このような役割分担は、渡辺さんにおいては学校の仲間文化でも成立している。誰かに定められた役割(肩書きなど)ではなく、それぞれがそれぞれのアイデンティティを認識し、その領域を尊重した上で成立する役割分担が生じているということがわかる。白井君は、学校を「人がいなすぎるバージョン」とし、学校とAにおける差は小さい、と話す。アイデンティティを表出できるだけの関係性があればそこは居場所になりうるのである。

このように学校と学校外での居場所感覚を振り返っ

てもらおうと、白井君と渡辺さんの間には大きな違いがあることがわかってくる。白井君は確固たる「自分」というものを軸に据え、その軸を持って居場所的な関係性を築いている。「こうありたい」、「こういう奴は認められない」というような判断基準をもって自らの所属している集団やそこにいる自分を相対化してみていると思われる。しかし、視点を変えてみると、白井君にとってその確立されたように見える自己が彼の首を絞めている様子もわかってくる。学校においてアイデンティティを表出できない自分と、学校において許されない存在である「何もしてない奴」が重なって見えることに思い悩んでいるのである。

このように複数の場を行きかっている者を詳細に眺めてみたとき、確固たる居場所は時に居場所形成の障害となるという恐れも見えてくるのである。

4. 結論

以上、考察を加えていくうちに、高校生たちは複数の集団を行きかいながら、その中で何かしらの共通の基盤と集団の中での役割分担を基に居場所を構築する、ということがわかってきた。また、時には関係性を作り上げられないことに思い悩み、既に持っている居場所を鎧にして他の集団に参加することを価値のないことと見なすというケースも見えてきた。一方で、渡辺さんのように、居場所をもつことが自信となり、他の集団への参加を後押しするパターンもあることがわかった。

その結果、「居場所」という感覚にはそれ自身が持つ社会への学びの可能性と、それと表裏一体となる閉鎖性の恐れがあることが浮かび上がってきた。

本稿で取り上げた高校生たちは、それぞれAという場の自分と学校での自分との間に葛藤をもち、それぞれの所属する集団で期待される姿とそこにマッチしない自分の姿とのジレンマに苦しんでいるのではないと思われる。「居場所」とは決して単層的なものではなく、複数の集団の中での自己が複雑に絡み合い、相互に影響を与えるものなのである。

最後に本稿の限界と課題について触れておく。本研究で得られた結果は、これまでの居場所研究では触れられてこなかった複数集団の相互の影響を考察したものであるが、あくまで少数の対象者の語りから得られた仮説的なものであり、より体系的、実証的なデータ検証を必要とするものである。また、集団間の行きかいということを考えると、やはり複数の集団における

観察が必要であると考ええる。本研究においては、学校外教育現場においては観察を行ったが、学校での様子に関してはインタビューに頼っている。もちろんインタビューという方式も、個人の内面を探るにあたって有効ではあったが、実際に複数の集団へのかかわり方を考察するに当たっては複数の集団の観察活動が必要となってくる。研究結果の妥当性の問題として、今後の課題として考慮すべき点であろう。

(指導教官 恒吉僚子教授)

〈注〉

- 1) なお、本研究においては、関係者・対象者・関係団体などのプライバシーを考慮し、登場する高校生、関係者の氏名、関係団体の名称などは全て仮名で表記すること、インタビュー記録に関しては若干の変更を加えておくことを断っておく。
- 2) 英語劇のような物、舞台装置は使用せず、音楽と身体表現のみで行われる。Aの教育活動の中心を占める物である。
- 3) 東京支部主催、東京支部内の各地区のテーマ活動を行っているグループ、活動が集まり、テーマ活動の発表を行う1000人規模の大ホールで行われる発表会。
- 4) 第4回インタビューで会った際、第1回のインタビューのことについて白井君が「本当はあの時Aのことだけだと思ってたからさー、まさか学校のこともなんか聞かれると思わなかったし、や、別にいいんだけどー、学校のことは、ね、マジ辛い」と語っていたことは印象深い。第1回インタビューの時点では筆者も気づかなかったが、ここで、真っ先に反応したことも、本人の中に学校に対して決して前向きではない思いが大きかったからであろうと思われる。
- 5) 渡辺さんの親友。渡辺さんがAに入会したのも、吉村さんが誘ったからである。
- 6) ここまで読んでいくと、藤田君が対人関係において大きなストレスを抱えているようにも読めるが、こういった藤田くんの学校へのかかわり方には彼自身の考え方が存在する。
第4回インタビュー「藤田って奴は一、基本的に友達要らないって人だから、あの子の理解者がたぶん世の中に3人くらいしかいないの。で、学校もほとんど友達いないみたいだしー、でもそれでいいっていう感じ?」と、藤田君自身が「友達」というものを基本的に欲していないことを白井君には語っている。藤田君にとって、「友達」というものはコミュニケーションを深く取れる人が数名いればそれで満足していることがわかる。

〈参考文献〉

- 新谷周平, 2001, 「『居場所』型施設における若者の関わり方—公的高中生施設「ゆう杉並」のエスノグラフィー—」 東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室『生涯教育・社会教育学研究』第26号, pp.21-29.
- Berger, Peter L. & Luckmann, Thomas, 1966 The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge, Doubleday &

- Company (=2003, 山口節郎訳『知識社会学論考 現実の社会的構成』新曜社)。
- Berger, Peter L. 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday & Company (=1979, 藺田稔訳『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社)。
- 萩原建次郎, 2001, 「子ども・若者の居場所の条件」田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わりの場」へ—』学陽書房, pp.51-65.
- 放課後子どもプラン, 2007a, 『放課後子どもプランの基本的な考え方』<http://www.houkago-plan.go.jp/document/img/concept.pdf>, 2007年10月30日アクセス。
- 2007b, 『放課後子どもプランの推進について』<http://www.houkago-plan.go.jp/document/img/plan.pdf>, 2007年10月30日アクセス。
- 水月昭道・馬場健彦・南博文, 2003, 『下校時の帰宅路に見られる子どもの道草行為とみち環境との関係』住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, pp.345-380.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房。
- 澤田英三, 2003, 「居場所としての駄菓子屋」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, pp.319-344.
- 住田正樹, 2003, 「子どもの「居場所」と対人的世界」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, pp.101-168.